

平成 27 年度事業方針

社会福祉法人 四天王寺福祉事業団

当法人は四天王寺開祖聖徳太子の御聖旨に基づき、ご利用者の尊厳を守り、良質なサービスを安全に提供し、安心して地域に暮らすことができるよう貢献することを誓い「宣言」を定めている。昨年度事業方針において、当法人の根幹をなす「宣言」を意識して日々の業務に取り組むよう標榜した。「宣言」は当法人の使命である。それを具現化するため事業方針、事業計画が毎年定められ、それらに基づき、施設の使命、職員個人の使命が設定されなければならない。また、設定するだけでは画餅に帰するおそれがあるため、Do-CAP シートを活用しそれらを管理、評価することが重要となる。各事業部において、「宣言」を意識していくよう各々取り組み、一定の成果は出ているようであるが、現状に満足せず、それぞれの取り組みが「宣言」を具現化できているのか面談、会議などで点検をしてもらいたい。

「宣言」の具現化を目指す法人にとって、最も大切なのは「宣言」に共感し、その具現化に資する人財である。その求められる要素を挙げるなら「福祉に対する情熱があり、しっかりとした目標を立てることができ、今すべきことが分かっており、周りから信頼される」人財となる。研修体系を精査し、そのような人財像により近づけるよう取り組む。また、世情に合わせ、様々なニーズに応えられるよう、継続して人財育成の手筈を整え、遺漏なく実施していく所存である。

サービスについては、これまで通りサービス標準書に基づき行っていく。可能な限りご利用者一人一人に合わせたより良いサービスを提供しようとするれば、研究が必要となる。問題があれば、速やかに時間・工程・価値の分析を行い、PDCA サイクルを回し、改善を実施し、サービス標準書を改定しなければならない。ご利用者への接遇など基本的なことから必要な研修を実施し、改善に繋げなければならない。

財務については、四天王寺悲田院高齢者複合施設の建替工事の償還金をこれまで通り滞りなく返済していく必要がある。計画的な返済には、当該施設群の収入増、コストカット等を継続して取り組むことに加え、法人内各施設の協力が不可欠となる。また今後の施設の老朽化に備え、さらなる中長期計画の作成や資金のプールは必須である。以上のことを踏まえると、各施設の財務担当者の知識、テクニックの向上が求められる。

地域に向けては、これまで通り各施設において折々に行事を実施し、地域の皆様に施設を理解してもらえぬ取り組みに努めなければならない。地域に対してどのような役割を担っているのか、いつも意識しておく必要がある。四天王寺病院においては地

域に切れ目のない医療サービスを提供するため設置した地域医療連携チームの活動の充実を図る。四天王寺悲田院においては、羽曳野市、羽曳野市社会福祉協議会と連携し、新たなニーズを掘り起こし、現状より発展した体制となるよう取り組んでいく。また四天王寺和らぎ苑と四天王寺悲田富田林苑においては、医療と福祉の連携によって、南河内地域の障害児者への在宅サービスの提供を開始しているが、今後サービスメニューを充実できるよう取り組んでいく。

高齢事業部において四天王寺紅生園という新しい施設が加わることとなった。法人合併という初めての試みは、まだ合併成立という通過点をクリアしたに過ぎず、実務面の課題も多い。しかしながら既存のご利用者、地域のためにも失敗は許されない。従来の紅生園の強みを生かしつつバランスを取りながら当法人の仕組みを盛り込み、交流を進めながら共に高めあう施設運営を目指したい。

委員会については、ルーティン業務を粛々と実施していく一方で、法人が抱える問題に積極的に取り組んでいかなければならない。それには本部と委員会、そして委員会間の連携も必要となる。より一層横の連携を意識していかなければならない。

職員の健康増進に資するため、昨年度は課題であったメンタルヘルスについて法人を挙げて研修を実施した。研修で学んだことを定着させるために、今年度以降も引き続き研修を実施し取り組んでいく。顧客満足を高めるためには職員満足の向上も必要と言われており、労働環境について今後も精査していきたい。

「自立・責任・自律」をキーワードとする取り組みについては一定の成果を収めているが、市場競争によく耐えている一般企業に比べると未だ及ばないことは否定できない。アベノミクスの進展による市況の動きは物価と工事単価の上昇として当法人の運営ならびに計画に影響を与えつつある。今後も政治、経済の動向によっては収入に直結する社会保険制度などに大きな影響を被る可能性がある。一方、地域、行政および他法人など外部からの要請で新規事業の立上げや既存事業の引受けを検討する機会もあり得る。我々は「宣言」を基準としつつ、様々な事態にスピーディに対応し得るしなやかな法人体制を獲得しなければならない。

現状に満足することは許されない。常に向上心を持ち、自身が成長しつづけることが、「宣言」を具現化する原動力となるのである。何か問題があり、答えに窮したときには、「宣言」に立ち返って欲しい。そこからすべては始まるのである。